

オオトラツグミのさえずり個体のセンサス結果（1996年春）

奄美野鳥の会*

〒894 鹿児島県名瀬市古田町 8-10, 高美喜男方

はじめに

オオトラツグミは、奄美大島に固有の鳥で、1971年に国の天然記念物に指定された。日本版レッドデータブック（環境庁 1991）では絶滅危惧種に指定されている。現在はトラツグミ *Zoothera dauma* の1亜種 *Z. d. amami* に分類されているが、尾羽がすべての個体で12枚であることや、大型であることによってトラツグミ *Z. d. aurea* と形態的にはっきり区別され、トラツグミとさえずりがまったく異なることは、両種が生殖隔離を成立させていることを極めて強く示唆し、オオトラツグミを独立種とすべき根拠となる（石田・樋口 1990, Sibley & Ahlquist 1990）。

オオトラツグミは、奄美大島とそれに近接する加計呂麻島でのみ生息が確認されており（石田ほか 1990）、個体群は極めて少数の個体で構成され、主要な生息環境である壮齢照葉樹林の開発の影響を強く受け、生存がきわめて危ぶまれている（石田ほか 1995, 石田 1996）。本種の保護策をこうじる上で、生息個体数を把握し、その変動を継続的に記録することは重要な課題の一つである（石田 1989）。奄美野鳥の会は、これまで環境庁の希少野生動植物種等生息状況調査の現地調査に協力してきたが、本年は独自に、もっとも重要な2地区で調査を行なったので、その結果を報告する。

調査方法

調査は1996年3月16日5時50分～6時50分に、里林道・金作原地区の8km区間を7人で、3月17日5時45分～6時45分に神屋地区の10km区間を9人で行なった（図1）。記録方法は石田ほか（1995）にしたがったルートセンサス法をもちいた。

このルートセンサスでは、オオトラツグミがおもにさえずる日の出前約30分の時間帯に、時速4～5kmで歩いて、オオトラツグミがさえずっていた位置を記録することで、調査地内でさえずっているオオトラツグミの生息数を推定した。短時間に広い範囲を調べ、かつオオトラツグミのさえずり時間の個体による差を補足するために、原則として出発地点を1kmずつずらして2人以上が同時にセンサスをはじめ、両端以外では重複して記録した。

調査に先だち、前日あるいはそれ以前の昼間に調査予定コースの林道上を自動車で行

1996年12月24日 受理

キーワード：奄美大島、オオトラツグミ、さえずり個体のセンサス

* 調査参加者氏名：荒田政信・恵沢岩生・橋木和仁・石田健・岩元さよ子・泉松雄・加藤鴻水・前田利久・高美喜男・盛三希子・森田秀一

この論文の資料請求ならびに内容に関する問い合わせ先：〒113 東京都文京区弥生 東京大学演習林 石田健

し、自動車の距離計をもちいて500mごとに林道端にアルミホイルを利用した目印をつけ、位置が確認できるようにした。5000分の1程度の縮尺の地図上に、この500mごとの地点を書き入れて記録用紙とした。各調査員は、まずそれぞれの出発地点に1kmおきに配置し、打ち合わせておいた同時刻に調査を開始して、片道2kmを30分で、往復1時間歩いた。調査時に各人が歩く区域周辺の測定地点を記入した地図と、時計およびポケットコンパスを携帯し、さえずっている個体の推定位置を地図上に記録した。

調査終了後に、記録地点と時刻、移動様式などをもとに、2人以上が重複して記録したと推定される個体の記録を除き、調査区間の全個体数を推定した。

結果および考察

オオトラツグミがさえずるのはほとんどが調査時間帯前半の日の出前30分間だった。今回は、後半に、前半で記録されなかった個体が記録されたことはなかった。里林道・金作原地区では7個体、神屋地区では11個体を記録した。表1に、石田ほか(1990, 1995)の1990, 94, 95年春の記録とあわせて、記録個体数を示した。

神屋地区では、1990年、1994年の調査1kmあたり1.6~1.8羽にくらべて、1995年と今年の記録は同じく0.8~1.1羽と相対的に少ない。里・金作原地区では、昨年の密度が少し低かった以外は、比較的一定であった。さえずっている個体の位置も、毎年だいたい同じような位置であった。ただし、1990年にさえずっていて、その後、さえずりの確認されない地点もあった。

表2には、オオトラツグミのさえずりが盛んな時期(3月中旬~4月上旬)のさえずり記

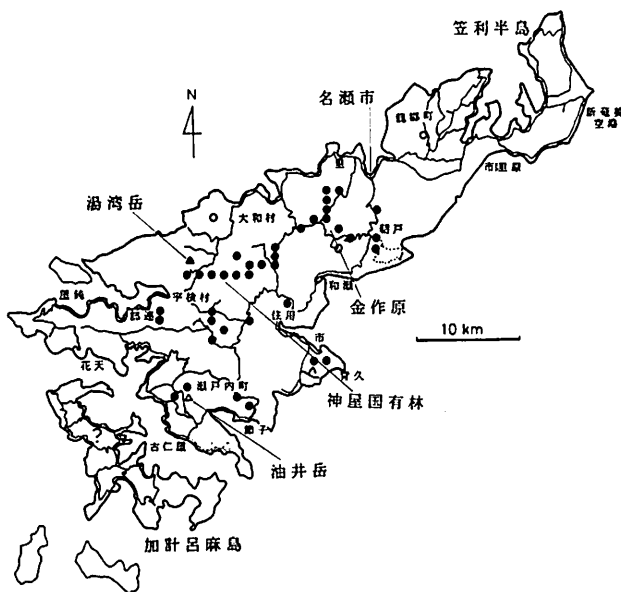


図1. 奄美大島の地図とオオトラツグミの記録地点。

Fig. 1. Map of Amami Island and recorded sites of Amami Thrush.

録地点にもとづく、全記録個体数を示した。上記したルートセンサス地点以外での任意観察では、名瀬市西田で2羽、住用村石原で1羽、下役勝で2羽、市で1羽、宇検村湯湾岳で2羽、瀬戸内町油井岳で2羽、住用村城で1羽のさえずり個体が記録された。

年によって観察努力量や調査範囲がことなるために、単純には比較できないが、1994年と1995年は、全数と大差のない個体数が記録されていると推定され、個体数

の減少が懸念される結果であった（石田ほか 1995）。今年、調査しなかったために記録がなく、1995年に記録されている地域とさえずり個体数は、名瀬市金作原西方地区の6羽、油井岳南西部の2羽、宇検村部連付近の1羽、瀬戸内町節子付近の2羽、住用村赤房林道の2羽の計13羽であった。1995年に3人同時の定点観察によって少なくとも9羽のさえずり個体が確認された湯湾岳付近では（石田ほか 1995）、任意観察ながら、1度には1羽ないし2羽しかさえずりが聞かれなかった。

したがって、今年観察を行なわなかった場所で記録された昨年の13羽分を考慮すると、全体としては昨年よりも多くの個体がさえずっていたと推測される。しかし、湯湾岳の例のように今年さえずり個体が少なかった地区や、里林道の一部で1990年にしかさえずりが聞かれなかった地点があることに、留意する必要がある。

記録したさえずり個体数が、調査した4年間でもっとも多かった1994年には、里林道～金作原と神屋地区におけるさえずり個体の密度が高く、37羽が記録されている（表1参照、石田ほか 1995）。このルートセンサス区域でも、今年が1994年より少ないといえる。このように、全体や地域によって個体数の増減の様子が異なっているようなので、今後、より広範囲の記録を毎年継続してとり、長期間の変動の様子をもっと正確に推定する必要がある。

矢原（1996）によって紹介された、新しいIUCNのレッドリストの基準に照らすと、オオトラツグミは、基準B1の生息地の面積が500km²未満でかつ生息地が5か所以下であることと、Dの成熟個体数が250未満と推定されることから、絶滅危機（Endangered）種にあては

表1. 里・金作原地区および神屋地区のルートセンサス結果. かつこ内は、調査区間長 (km).
Table 1. Numbers of singing birds recorded in route censuses at Kinsakubaru and Kamiya.
Numbers in parentheses indicate census course length in km.

地区\年	1990年	1994年	1995年	1996年
里・金作原	6 (9)	16 (12)	9 (14)	7 (8)
神屋	18 (11)	21 (12)	7 (9)	11 (10)

1990-1995は、石田ら1995から抜粋
data for 1990-1995 were referred to Ishida *et. al* (1995).

表2. ルートセンサスおよび任意観察等によるオオトラツグミのさえずり確認個体数.
Table 2. Numbers of singing birds recorded in the route censuses and at singing points from other observations, mid March to early April.

調査法\年	1990年	1994年	1995年	1996年
ルートセンサス	24	40	18	18
その他の観察	1	14	14	11
合計	25	54	32	29

「その他の観察」は、1990年と1996年は任意観察のみであるが、1994年と1995年には定点観察も行なった。1994年、1995年に比べて、1996年の観察地点はかなり少なく、見落としが多い（1990-1995は、石田ほか1995から抜粋）

In 1994 and 1995, point censuses were done. The observation points were far fewer in 1996 than in 1994 or 1995, and the total number of singing birds is underestimated in 1996.

まる。しかし、成熟個体数はむしろもっとも危険度の高い絶滅寸前種（Critically Endangered）の基準Dである50個体に近いと推定され、さえずりの聞かれる地区でも天然林の伐採が行なわれており、合計した記録個体数の結果を厳しく解釈すると、同C2の連続的減少が起きている可能性も強い。したがって、本種は絶滅寸前種に相当すると考えられる。オオトラツグミを保護するために、主要生息域である神屋地区周辺の住用川中上流域と里林道から金作原周辺とその西方地区での伐採禁止を含む早急な保護処置が強く望まれる。

今後も、継続的な調査にもとづく資料によってオオトラツグミの生息数の変化を追っていくことが、当面の課題である。また、さえずりによる個体識別などの手法も取り入れて、より正確な個体数とその変動の把握に努めたい。

引用文献

- 石田健. 1989. オーストンオオアカゲラとノグチゲラ個体群の保護と調査・研究に関する提言. *Strix* 8: 249-260.
- 石田健. 1995. オオトラツグミは今一美しいさえずりを永遠に. 私たちの自然 (406): 14-17.
- 石田健・金井裕・金城道男・村井英紀. 1990. オオトラツグミ *Zoothera dauma amami* の分布, 生態および保護. 1989年度環境庁特殊鳥類調査報告書. pp. 41-63. 環境庁, 東京.
- 石田健・樋口広芳. 1990. オオトラツグミ *Zoothera dauma amami* の形態と分類. 1989年度環境庁特殊鳥類調査報告書. pp. 65-78. 環境庁, 東京.
- 石田健・植田睦之・藤田剛. 1995. 奄美大島におけるオオトラツグミの生息状況. 奄美大島希少鳥類生息状況調査報告書, 1994年度環境庁稀少野生動植物種生息状況調査. pp. 41-59. 環境庁, 東京.
- Sibley, C.G. & Ahlquist, J.E. 1990. *Phylogeny and classification of birds*. Yale University Press, New Haven.
- 矢原徹一. 1996. IUCN レッドリストカテゴリー: 日本語訳とその解説. 保全生態学研究 1: 1-23.

A population estimate of the endangered Amami Thrush made by counting singing birds.

Amami Ornithologists' Club

Furuta-machi 8-10, Naze, Kagoshima 894, JAPAN

*reference address: Ken Ishida, University Forest, University of Tokyo, Yayoi, Bunkyo-Ku, Tokyo 113

The Amami Thrush is believed to be a distinct species which is endangered, and is endemic to the single small island of Amami in southern Japan. It inhabits mature evergreen forest. The population is quite small and fragmented. We estimated the population size by counting the singing birds in spring 1996. The number recorded this year was 29, and the whole breeding

population maybe a little larger than 58 birds (= 29 x 2). The population in the main habitat is thought to have decreased in recent years, probably owing to clear cutting of naural forest good for the species.

The species is "endangered" and probably "critically endangered" according to the IUCN's new categories.

Key words: Amami Thrush, critically endangered, singing bird census